

「阿波おどり」における踊りの変容
-1929年から2017年を中心に-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-07-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 敦子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20257

「阿波おどり」における踊りの変容 —1929年から2017年を中心に—

1. 問題意識と目的

[近年の民俗芸能の研究動向]

民俗芸能は各地域に固有のものとしていたが、資本主義経済や交通およびメディアの発達など様々な社会の影響を受けており、各々の芸能には普遍的な独自性があることを前提とする本質主義の立場では明らかにすることはできない。民俗芸能に関する研究の中でも、その「伝統の創造」に関しては、実践者の社会との関わりに着目した研究が報告されている。これらの研究は、本質主義ではなく、社会からの影響を分析した点において「人々が自分たちの社会的世界を能動的に構築する」という構築主義の立場による研究であり、さらに芸能の実践者達の内部的な差異にも着目した質的研究と言える。しかし、日本の民俗芸能の「芸能の内容」、特に民俗舞踊の踊りそのものが、社会の影響によりどのように変容したかについての包括的な報告は僅少である。

[本研究の目的と方法]

本研究では、「阿波おどり」における踊りの変容を事例として、民俗芸能の変容を舞踊人類学的考察により明らかにする。すなわち観光政策により審査場が設けられた1929年から2017年に至るまでの「阿波おどり」における踊りの変容を、文献調査（映像資料を含む）およびフィールド調査より明らかにすることを目的とする。本研究の対象である「阿波おどり」は、「郡上おどり」（岐阜県郡上市八幡町）および「西馬音内盆踊り」（秋田県雄勝郡羽後町）と共に江戸時代から伝承されている日本の代表的な盆踊りである。いずれも大正末期から昭和期（1920-1930年代）にかけて、唄中心から複数の楽器中心への音楽の変化、歌詞における猥雑性の排除、踊りや衣装の洗練化などの芸能の変容が地元民により行われている。これは、維新政府による盆踊りへの弾圧が大正期に弱まり昭和期に全国的な復興を迎えたこと、大正後期から旅行文化が大衆に普及し、各地の民謡が観光関連産業やレコード産業、放送局の商品として用いられたという背景があると考えられる。本研究では「阿波おどり」における踊りがどのように変容したかを通史的にたどり、変容の要因を明らかにする。要因の考察においては、社会との関わりのみならず、実践者達がどのように変容に関わったかという観点から論じる。「阿波おどり」は基本的な踊りの動作がシンプルであるため、具体的な動作の変容がわかりやすい。また宗教性が希薄なため、信仰により踊りの動作や音楽が規制されることはない。そのため観光政策やメディアの発達による影響が実際の踊りに反映しやすいと考えられ、これらが民俗舞踊に及ぼす影響をさぐるのに適切である。

2. 「阿波おどり」の概要

「阿波おどり」は徳島市中において藩政期より盆の時期に行われる伝統的民俗舞踊であり、1920年代後半より観光政策が開始され、戦後は急速に隆盛し年間130万の観光客を誇るようになった。毎年8月12日から15日に徳島市内の6つの演舞場や舞台ホールにおいて、連と呼ばれる多数の集団（1集団：数十人-数百人）が公演を行う。各集団は踊り手と和楽器奏者を擁し、踊りながら行進する形式が基本である。元来は三味線単独による即興性の高い音楽に合わせた自由な踊りであったが、現在は多種の和楽器による調律された合奏音楽であり、予め緻密に構成されたフォーメーションと演出による統一的群舞となっている。

3. 先行研究と本研究の独自性

民俗舞踊の音楽と踊りの変容については、「現代バリ島舞踊」に関し、元来バリ島の奉納舞踊であったものが当時の宗主国オランダにより再構成されたものであるという研究がある。これによると舞踊の神聖性と現代的表現性の両立が図られ、芸能の内容を知らない人でも容易に楽しめるように工夫がされ、感性の刺激としてのバリ島スタイルを損なうことなく、外来の音楽と舞踊が取り入れられていると報告されている。

日本の民俗舞踊においてはどうか。「郡上おどり」では、元来楽器演奏はなく、踊り手自身が音頭を取りながら踊り、他の踊り手達は音頭を中心に3-20人の輪を作って踊っていたが、「郡上おどり保存会」が檜の上でお囃子音楽を提供し、踊り手はその周囲に大きな輪になり踊る形式に変容した。「西馬音内盆踊り」においては、1935年（昭和10年）に「全国郷土舞踊民謡大会」に出演の際、楽器を増やし、衣装と踊りが替えられた。「おわら風の盆」（富山県富山市八尾地区）は、1929年に東京の三越本店において富山県物産店が開催されたときに若柳吉三郎（日本舞踊家）により「女踊り」と「男踊り」がふりつけられている。

日本の民俗舞踊の変容については、このような散発的な報告はあるが、楽器がなぜどのように選定されて取り入れられたのか、踊りの型にはどのような変化があったのか、などの報告はない。本研究では「阿波おどり」において、昭和初期に審査場が設けられて以来観客により「どう見られるか」という視点が生まれ、審美性が問われるようになったことで、踊りの動作そのものが意図的に変えられ、新たな様式が生じる過程を示す。さらにメディアというフィルタを通して観光客に「見られる」ための芸能となったために、踊り手への視線が変化したことを示し、踊り手もそのような視線の変化を意識していることを明らかにし、これらを踊りの変容と関連づけた点が独創的である。

4. 本研究の構成と内容

本研究は、次のように4つの章から構成される。

第I章 序章

「阿波おどり」の概要、研究の目的、先行研究における位置付け、研究の方法（文献・写真・音源・映像資料の調査およびフィールドワーク）を示した。先行研究には、近年の民俗芸能の変容に関する研究と舞踊人類学の研究動向、研究のアプローチ法としての構築主義とその課題をまとめ、本研究の位置づけを示した。

第II章 「ゾメキオドリ」から「阿波おどり」へ

観光政策がとられる以前（「ゾメキオドリ」と呼ばれた時代）の「阿波おどり」の特徴を言説と写真資料よりたどり、昭和初期からとられている観光政策の内容を示し、さらに現代の「阿波おどり」の特徴を、他の類似の民俗舞踊との比較分析により示した。特に「阿波おどり」で重要とされるリズムの特徴を三味線音楽の奏法により明示し、さらに次章への布石として、観光政策による音楽の変容の概要を示した。

第III章 「阿波おどり」における踊りの変容過程

本章は本研究の中核であり、男女差の希薄な自由な乱舞であった「阿波おどり」が現在のような様式化された統一的群舞に変容するまでの過程を、「様式化」・「動作の統一化」・「『本格的フォーメーション』¹の導入」という3つの指標により分析した。また変容の要因を、演舞場の設置による観客の踊り手への視点の変化、メディアによる女性の踊り手への新たな視線の形成、「阿波おどり」の集団が一堂に会し順列に踊ることにより観客に各集団を比較する視点が形成されたこと、コンクールや選抜大会の実施により集団間に技量の優劣、インパクトの強さ、独自性の発揮という点での競合関係が形成されたこと、写真等のメディアにより踊り手に被写体として意識が生まれたことと考察した。具体的内容は以下の通りである。

¹ 特に、踊り手全員が一斉にある隊形から他の隊形に塊の集団として移動するのではなく、各踊り手の移動範囲・移動方向・移動開始のタイミングを異なるものに予め設定することにより、次々に複雑な隊形を整然と構成していくことを、本研究における「本格的フォーメーション」とした。

[様式化]

「阿波おどり」の原形とされる「津田の盆踊り」²との動作の比較分析により、男女差の希薄な足運びから、現在のように男性は外輪、女性は内輪という差異の明確な足運びに変容したことを示し、この過程を「阿波おどり」に関する言説、写真、映像（映画・NHK 放送番組アーカイブス）よりたどり、女性の足運びが下駄の爪先立ちの内輪へと1960年代に変化したことを明らかにした。その要因として、女性の踊り手に女性らしさやセクシュアリティを見出す視線がメディアにより形成され、カメラの一般大衆への普及により女性の特に足元が頻繁に撮影され、女性の踊り手が被写体としての自己を意識し、女性らしい所作を心がけるようになったためと考察した。ここから「女踊り」というスタイルが生まれ、これとの差異化により「男踊り」も確立した。また女性が太腿を露出することのタブーが希薄となった1960年代後半から男装の女性が見られるようになり、ハッピーを着て踊るスタイルが「女ハッピー踊り」として台頭したことを明らかにした。さらに「男踊り」と「女踊り」の各々の特徴的な要素の組み合わせにより、「女ハッピー踊り」にはいろいろなバリエーションが生まれていることを示し、女性の踊り手に求められる群舞としての美学と、各集団の独自性の追求の結果であると考察した。。

[動作の統一化]

屋内での公演が1964年に開始し、舞台芸能としての洗練さが求められるようになり、「女踊り」の動作が下肢において、後に上肢においても統一化されるようになった。次に「男踊り」の動作が集団内で揃えられるようになったが、「女踊り」に比べある程度自由性が維持されたことを、文献より示した。

[「本格的フォーメーション」の導入]

さらに1980年代にある「女踊り」の名手により、予め踊り手の動作の軌跡、可動範囲、タイミングを足運びの方向と歩数により決めておき、整然とあるフォーメーションから次のフォーメーションに移動する方法が開発され、この手法が「阿波おどり」全体に広まり、現在のような統一的群舞が確立したことを、当時の文献資料と当事者へのインタビューにより明らかにした。

第IV章 結論

本章では「阿波おどり」における踊りの変容を、様式化されていない自由な踊りから、「様式化」、「統一化」、「フォーメーションの導入」という3つの側面が相互に影響しあいながら進行し、現在の統一的群舞となったことを結論とした。変容の主たる要因は観光政策とメディアの発達であり、「阿波おどり」における個々の実践者達の様々な活動の中から影響力の大きなものが潮流となり、「阿波おどり」全体への変容へとつながったと結論づけた。

² 徳島市東部沿岸に位置する「津田・新浜地区」に伝わる盆踊りであり、少なくとも大正期までは市中の盆踊り（「阿波おどり」）と同じものとされていた。市中から離れた漁師町であったために観光政策の影響を受けず『阿波おどり』の原形性をとどめている」（徳島県教育委員会への聞き取り）として「県指定無形民俗文化財」（2002）となっている。